

図書館報

第122号
平成19年1月10日
大分工業高等専門学校
図書館
大分市牧1666番地
TEL 097(552)6084
FAX 097(552)6786



キャンベラ市（オーストラリア）中央奥が国会議事堂。湖も含めた街全体が都市計画による人工物。

〈もくじ〉

扉写真「キャンベラ市(オーストラリア)」	一般科目(英語科)・教員	穴井孝義	1
「図書室から図書館へ、そしてこれから」	基礎専門・教員	梅津清二	2
学科推薦図書の紹介(2)	制御情報工学科・教員 都市システム工学科・教員	鶴沢偉伸 島田晋	3
豪州体験記	一般科目(英語科)・教員	穴井孝義	4
「おおいた文学散歩道(5)」	一般科目(国語科)・教員	山田繁伸	5
思い出の一冊「国家の品格」	都市システム工学科・教員	田中孝典	6
「白い航跡」	都市システム工学科・教員	前稔文	6
「蝉しぐれ」	事務部長	前田正満	7
「若き数学者のアメリカ」	学生課長	河野美奈	7
「大分県高等学校図書館研究大会の感想」	制御情報工学科3年	鈴木克也	8
平成18年度(後期)学生図書委員名簿			8
平成18年度4月～9月クラス別貸出統計			8
編集後記	図書館長補佐	軽部周	8

題字「図書館報」は大城桂作校長筆

図書室から図書館へ、そしてこれから

基礎専門 梅津清二



大分高専に赴任したのは、1971年であった。当時の新任教員は十分なゆとりがあったので、図書室に毎日の様に通った。図書室は、現在の教務係の場所で、文字通り「図書館の揺籃期」と言える。しかし、大分県で、最初の工業

系高等教育機関として、貴重な文献、資料が集められていた。特に、故人になられた機械科の二木先生、歴史の野口先生が、それぞれの専門分野で、関心を寄せられた技術史の文献に目が止った。また、少なからぬ学生が、草創期の図書室でむさぼり込むように読書の世界を堪能し、その後、国際的な科学者、企業における最前線の開発チーム・リーダー、あるいは詩人、映画評論家など各方面で活躍している。

高専創立10周年を迎える頃、現在の建物が、新設され視聴覚教室も含め、当時、最先端技術を集めた図書館として整備された。私は、当初、数学科に所属していたこともあり、大分大学教育学部の先生から、「小・中学校の算数、数学」研究会の助言者を依頼されていた。そのような機会を与えられ、当時「水道方式」で知られた遠山啓（東工大）先生の数学教育に興味を覚えた。その内容は、幼児教育から、小・中・高、さらに高等教育まで、一貫して、数の裏にある「量」感を結びつける体系であった。その頃、東北大学の数学の先生による「数学教育の現代化の視点」という一文を目にした。若気の至りか、相手が数学の専門家であることも忘れ、「数学教育の『現代化』の発展のために」という批判の原稿を投稿した。その後、反論・回答は、未だないが、これも「高専図書館」の「お陰？」である。

私は、1974年に配置換えにより機械工学科へ移った。環境の変化もあり、中村清治氏の「技術論論争史」に興味を持つようになった。土木の島田先生、歴史の森本先生に、解らないところなど相談しているうちに「読書会」を始めることになった。図書館のゼミ室などで開催したが、私達の読書会に興味を持つ人がつぎつぎと増えた。その後、加わられたのは、森永先生（哲学）、小川先生（国語）、加藤先生（機械）、青木先生（情報）などである。さらに、読書会の成果を、学生に還元する目的で、機械科の講義に「技術論」の講義

を開設した。1987年に、私が内地研究で高専不在の間、森永先生、森本先生、加藤先生、島田先生、小川先生に「オムニバス方式講義」をお願いすることにした。講義題目案は、それぞれ「技術の哲学」、「技術の歴史」、「自動車工業論」、「技術と環境」、「技術文書の書き方」などである。私が、戻った年の夏、国専協主催の「総合化授業」教研集会の案内がきた。5人の先生が行なわれた「技術論」オムニバス授業は、集会のテーマに沿うということで、学内で推薦された。私は担当しなかったが、留学中の御世話になった先生への御礼として、教研集会で発表した。当時、全国的にも、専門と一般の教員の共同による授業という形態はほとんどなかった。国専協副会長（当時沼津高専校長）の工藤圭章先生は、文化庁のご出身であったこともあり、閉会の挨拶で、「大分高専で素晴らしい実践が行なわれている」とコメントされた。講義「技術論」は、その後、紆余曲折があったが、今日の「技術者倫理」が重視される時代に、日本工学協会等においても、先駆的な授業と評価され、現在は名誉教授の後藤末弘先生が担当されている。森本先生が、古文書研究の経験から、読書会の重要性は「声を出して読む」ことにより、著者の伝えたいことを、「全面的、多角的に理解」できる点にあると指摘されたことが実を結んだのであろう。

私は、2005年度図書館長を務め、全国図書館大会に参加した。学校図書館だけでなく、全国から自治体の多くの関係者が集まられた。少なからぬ「図書館人」が、地域の文化継承のために、永年かかわっておられることに感動した。今日、電子図書館の時代となり、従来の「図書館」のイメージは大きく変貌しようとしている。しかし、近年普及が著しい最新技術と同じように、「電子化」が進むほど、人間の顔をした対応、個別の読書指導、読書会等、図書職員のきめ細かい役割りがますます重要であることを痛感する。大分高専では、高専草創期からの図書職員と図書館関係教員の献身的なサポートもあり、学生による図書館活動が深く根付き、生き生きとして行なわれている。本校の学生は、例年行なわれる高校生との読書会において、指導的役割りを果たし、関係者から高い評価を頂いている。学校図書館は、授業を行なう教室に対して、「学生を育てる『もう一つの空間』である」と言えるだろう。

学 科 推 薦 図 書 の 紹 介

— 制御情報工学科 —

情報関係は1年経つと次々と新しい技術が生まれるため、専門書ではなく、社会人になってからも永く役立つ雑誌「日経ビジネス」を紹介します。この雑誌は年間購読の一括払いで申し込み、毎週送付されますので、書店まで買いに行く手間がかかりません。最近、大きな書店でも販売しているようです。経済動向はもちろんのこと、時々話題が中心に取り上げられます。もちろん、様々な分野の新しい技術も取り上げられますが、技術書ではありませんので、技術の概要と社会への影響などについて解説されています。技術の側面からだけでなく、色々と気づかされるが多々あります。

私自身の経験では、社会人になりたてのころは、どうしても仕事に関係する技術に目が向き、おのずと仕事の専門書を中心に読むようになりました。数年経って仕事も覚え、1人前と言われるレベルに達すると、技術だけの世界から技術と社会の関わりに興味を持つようになり、どういうわけか「日経ビジネス」を読むようになりました。社会人になって5年ほど経ってから購読を始めた記憶があり、30年近く継続して今でも購読しています。

実際に購読を始めると、1冊を1週間で読み終わることができず、次号が到着すると段々と溜まっていく一方で苦痛を感じるようになりました。止めたとしても1年分を払っていますので、すくなくとも1年は止められません。恐らく半年間は雑誌に追われ、一部を読んで捨てていたと思います。幸いに、連載は堺屋太一氏などの著名な方が事実に基づいてタイムリーな話題を面白く解説していましたので、毎週楽しみに読むようになり、大変ためになったと感じています。それ以外は興味のある記事だけを読むようにしました。段々と慣れるに従って、最近ほとんど記事を読み終えてから捨てるまでになりました。30年近くも継続して購読できているのは、何かに役立っていると感じているからでしょう。

学生の皆さんにはなかなかお勧めしにくい図書で、読む機会が少ないと思いますが、1人前の技術者になってからでも、自分の将来のために継続して読んでもらいたい図書です。

ひでのぶ
(学科主任 鶴沢 偉伸)

— 都市システム工学科 —

今回は5Cの「環境システム」の授業で使用している「岩波新書」から数冊を紹介します。

土木工学科から都市システム工学科へ学科名称を変更して3年を経過しようとしている。カリキュラムの上では、従来の土木工学科から大きく変更するつもりはなかったのだが、JABEEへの対応に伴い1コマ50分から90分授業となり、三力と呼ばれる「構力」「水理」「土質」の時間や一般科目では「数学」等の時間が増加した。

都市システムとしては、構造物の計画・設計・施工といった内容から、「環境」をキーワードとした都市景観・水環境・廃棄物対策・リサイクルの分野についても大いに興味や関心を抱いて欲しい。

小生が担当している5C選択科目「環境システム」では、毎年テキストを変えてトピック的な内容を学んでいる。今年度は、三橋規宏著「環境再生と日本経済—市民・企業・自治体の挑戦—」を読んでいる。この本は三橋先生が日本列島の各地を取材して、様々なコラボレーションの取組が循環型（持続可能な）社会の視点から描かれている。7年前に書かれた「ゼロエミッションと日本経済」の続編である。

昨年度は高橋裕著「地球の水が危ない」であった。深刻な水問題が世界的に同時進行中であることを国際的な視野と日本人としての観点から述べている。国際河川をめぐる紛争等、目を開かれる。

一昨年度は寄本勝美著「リサイクル社会への道」を読んだ。ごみ問題についてシアトル市を始め、外国や日本の都市での取り組み、リサイクル社会を築くため、廃棄物ゼロ社会を求めて身近なごみの問題を語っている。この本は約10年前に書かれた「ごみとリサイクル」の姉妹編である。

小生たちが大学生になったころ、岩波新書は学生の教養として、何冊かは読んでおかなくては、という雰囲気や環境であったと思い出す。今や時代は変わっても、沢山の書籍から教養を蓄え、専門の学びにも生かして欲しいと思っている。

すすむ
(学科主任 島田 晋)

豪州体験記

一般科目（英語科） 穴井孝義

昨年2月から10ヶ月間、高専機構在外研究員としてオーストラリアの首都にあるキャンベラ大学で英語教育に関する研究の機会を得ました。この紙面では、研究内容とはかけ離れますが、私が体験したホームステイ生活と大学の話について触れようと思います。

大学の斡旋で紹介されたホームステイでは、60代半ばのご夫婦の家庭にお世話になり、滅多に味わえないオーギーライフを体験することができました。

驚いたのは、まず食事。この家では、朝はトースト、昼はサンドイッチと、かなり軽い食事で済みますのですが、夕食だけは毎日入れ替わり立ち替わり、ビーフ、ラム、ポーク、チキンといった‘肉メイン’の重たい料理がドカンと出てきました。初めの頃は、「日本では高い肉が毎日食べられる！」と結構喜んで頂いていたのも束の間。回を重ねるにつれ、さすがにコッテリ系の食事に飽きてきてしまいました。時々、米料理も出してくるのですが、日本米とは違った細長い陸稲米で、固い芯が残っていても、オーギーはそんなことにはお構いなし。しかも、どうも洗米しないまま炊いている感もナキニシモアラズ…。しかし、不思議なもので、最初こそ気にしていた私もいつの間にかそんな大雑把なオーギー料理に慣れきってしまい、ほとんど気にならなくなっていました。

ホームステイ生活で最も大変だったのは、極端なまでの水の節約。今年のオーストラリアは雨量が異常に少なく、過去百年の中でも最悪の干ばつだったらしく、キャンベラも常に水不足で、家庭での散水時間も午前・午後各3時間のみと規制が強化されていました。私のホームステイ先でも節水が徹底されていて、洗濯のすすぎ水は次の洗濯に必ず再利用し、シャワーも常に5分程度という状況でした。日本では毎日浴槽に浸かっていた私も、さすがにこの状況下では湯船に浸かる勇氣はなく、シャワーを浴びる際も「如何にして効率よく身体を洗うか」が至上命令でした。日本の温泉がどれほど恋しかったことか！

話は変わって、キャンベラ大学について。同大学は野生のカンガルーが見られる程のどかで広大な敷地を有し、約一万人の学生を抱える大規模大学です。学内には、診療所や銀行、郵便局、喫茶店にバー、

さらには旅行代理店や美容室、保育所までが入っていて、いわば大学内に小さな町が存在しているようなものでした。ほぼ全ての用事が大学内で済ませられるために、交通費もままならない貧乏学生にとっては、とてもありがたい環境のようでした。

研究で私が主に関わった英語教師のためのコースには、中国、台湾、韓国、ロシア、サウジアラビアといった「英語を外国語として教える国」からの留学生（英語教師経験者）が、オーストラリア人学生と共に英語教育論を学んでいました。もちろん、留学生同士の会話も英語です。お互いが「お国訛り」の英語で意思伝達を図るのですが、世界にはアメリカ英語やイギリス英語だけでなく、いろいろな英語の発音があること、そして誰もが自分の話す英語に自信を持っていることを痛感させられました。日本人も、世界にはさまざまな英語の発音があることを理解し、自分達の話す英語に自信を持つことが大切だということを強く感じました。

最後に、英語留学を希望する学生諸君へアドバイスを。今や日本の生活様式は欧米と大して変わりありません。従って、たとえ英語留学しようとも、「英語でコミュニケーションを図ろう」という積極的な姿勢で語学習得を目指さなければ、海外生活そのものは日本での生活と何ら変わらず、せっかくの「語学留学」も実りの少ない、単なる「娯楽留学」に終わってしまうということを再認識してください。



留学生とオーストラリア人学生

おおいた文学散歩(5)

瀬戸内晴美「ここ過ぎて」を歩く

一般科目(国語科) 山田繁伸

瀬戸内晴美は、大正11年5月徳島県に生まれた。作家として活躍していた昭和48年に、突如、出家得度した。以来、寂聴を法名として京都嵯峨野に寂庵を結び、今日に至る。そして、今年84歳、秋の叙勲において文化勲章を受章した。授章は、自我に目覚めた女性を描いて人々を勇気づけ、出家後には自身の切に生きる姿によって独自の文学世界をつくったことによる。

その瀬戸内に、大分を舞台とした『ここ過ぎて』（新潮社刊）という作品がある。それには「白秋と三人の妻」の副題がついている。妻とは、田村俊子、江口章子、佐藤菊子の三人である。章子は香々地町、菊子は大分市の出身である。在学当時、二人に親交があった訳ではないが、1学年違いで、二人は大分高女に通っていた。作品は、なかでも江口章子が中心に描かれている。「二章」は国東取材の瀬戸内の思い出から始まっている。

はじめて訪れたのは初夏であった。私は青田の中の道を歩いたり、山道を上ったりした。五月雨が時々私の菅笠をかすめて走ったかと思うと、雲間から南国の陽がまぶしく照りつけたりする。まさしくそこは仏の里であった。（中略）とりわけ富貴寺の中に、全くさりげなくお座りになった榎の木のア弥陀如来の御前では座りこんだまましばらく動けなかった。

二度目に国東を訪れたのは、六郷満山の峰入り行に参加した昭和54年である。六郷満山とは、一峰の名ではなく、国東の六つの地域を指す六郷に点在する天台寺院の総称である。女人禁制の峰入り行に瀬戸内は無理に頼み込んで参加した。

一切私語は許されず、不動本尊の真言だけは称えてもよかった。一日の行程は50軒なので、終いには頭も体も空っぽになり、自分でない何か歩いているとしか思われない。生身の不動尊を感得するというのが、行者の目的らしいが、一日ではとてもそんな境地には近づけない。ただ、山野を飛ぶように歩き、山道を駆け上り駆け下るうちに、自分が消えていくという不思議な経験は、富貴寺

で微塵に解体した自分を見たと同じ体験であった。

作品の中心人物である江口章子は、昭和6年42歳の時、京都の大徳寺から西国三十三ヶ所の観音霊場巡礼の旅に出ている。瀬戸内は、自分を章子の巡礼姿に重ねているのかも知れない。章子は、うらぶれては故郷の香々地に帰り、また再び故郷を後にして京都をはじめ各地を転々とした。香々地の長崎鼻に「ふるさとの香々地にかへり泣かむものか生れし砂に顔はあてつつ」の歌碑が建っている。瀬戸内はその長崎鼻を次のように描く。

長崎鼻というのは、香々地の海岸線から周防灘に向って、天狗の鼻のように細長く突出した岬である。このあたりの海岸線はたくさんの岬が並び、断崖絶壁のリアス式海岸となっているが、中でも特に長い岬が長崎鼻だ。

瀬戸内は、長崎鼻の松林の中を歩きながら、章子の熱い望郷の思いを想像する。そして、章子の生家跡、一時すんでいた香々地の山中、よく訪れた国見町の大光寺など県内各地を取材した。

大光寺の住職武多宗拙氏は、瀬戸内の描く章子の晩年に対して、食べ物を探め狂い死にしたことはないとい異議を唱えていた。終戦直後の香々地は蟹の豊漁でにぎわっており、章子に食べさせる物がなかったはずはないとおっしゃっていた。いずれにしても瀬戸内は、江口章子を中心にして自我に目覚めた大正の女性たちを『ここ過ぎて』で描いている。



思い出の一冊

国家の品格

藤原正彦 著 (新潮新書)

都市システム工学科 田中孝典



私は出張や旅行に行くときには、適当に1、2冊の本を購入します。書店で手に取ってざっと目を通して面白そうな本を購入しますので、特にジャンルは決まっています。この本も出張のときに購入したもので、現在もベストセラーのなかの一つ

です。

題目は堅苦しいですが、講演記録がもとになっていますので、文章は読みやすく、一気に読み終えました。著者は数学者ですが、論理を最重視する数学者が書いたとは思えない著書です。経済、文明、教育や自然等を題材にして、今後、日本人としての考え方やあり方に警鐘を鳴らすような内容で、「論理だけでは物事は片付かない。日本人が世界に対して誇るべきは情緒と形である。」が著者の結論です。

著者の考え方は行き過ぎでは？と思う点がありますが、例えば、「道徳」、「倫理」、「惻隠の情」、「誠実」や「正義」などに関する内容については、説得力と共感する点が多くあります。それらは、日本人としてではなく、一個人の人間として大事な要素であると感じます。

私が専門としている建設分野では耐震強度偽造問題や官製談合など技術者倫理にかかわる事故、事件により技術分野の社会的信用が低下しているのが現状です。今後は、技術者倫理の重要性が大きく問われる社会になると思います。学生の皆さんは現在学んでいる専門分野の技術者への道に進まれると思いますが、どの分野においても技術者は高い知識、技術と豊富な経験を身に付けることは大切なことですが、それと同じように、社会的な道徳や倫理観を学ぶことも大切であると思います。何事もバランス感覚が大事であると思います。そのような事を考えるキッカケとなる一冊になればと思います。

白い航跡

吉村昭 著 (講談社)

都市システム工学科 前 稔文



私自身、建築分野の出身であるため、建築の専門書であるなら「新建築」(彰国社)や「GA」などを見るのも良いかと思えます。しかし、専門書となると個人の興味が大きく左右されるので、ここでは一般図書の中から推薦する本を挙げたいと思います。

まず、私が好きな作家は司馬遼太郎氏であり、彼の作品である「坂の上の雲」や「竜馬がゆく」は、わざわざ私がここで述べるまでもなく、是非、一読していただきたい図書です。宣伝するつもりはありませんが、「坂の上の雲」はNHKでドラマ化されるということで大変楽しみにしています。また、同氏の作品で「故郷忘じがたく候」も同様に推薦したい本です。

上述の司馬遼太郎氏の作品に匹敵するくらい私が推薦したい図書は吉村昭氏が書いた「白い航跡」です。この図書は、高木兼寛(たかきかねひろ)の生涯を描いた伝記小説です。主人公である高木兼寛は、東京慈恵会医科大学の創立者にして、脚気予防法を確立した医師として知られています。その彼は、最初は戊辰戦争の軍医として出兵し、後に陸軍軍医として、明治時代当時は原因や治療法が不明であった脚気対策に取り組みました。その中で、江戸末期から明治・大正という時代を背景とした様々なエピソードや、陸軍軍医であるドイツ医学を学んだ森林太郎(森鷗外)との論争は興味深いものです。とりわけ、高木兼寛の周囲では悲しみに耐えがたいことが次々と起こる中、彼が自分の信念を貫き通した強い精神力には脱帽してしまいます。幸せな人生ではなかったかも知れませんが、彼の生き方に強く共感する部分があります。

ここでは、本書の結末は記しませんが、私は特に最後の部分に惹かれ、読み終えたときにはひとつの達成感を覚えました。また、今までの自分を振り返る機会を与えてくれる本だと感じました。そういう本に巡り合えたことを嬉しく思うと同時に、私にとってはいつまでも心に残る一冊です。

思い出の一冊

蝉しぐれ

藤沢周平 著 (文芸春秋)

事務部長 前田正満



藤沢周平はいわゆる時代小説作家で、数多くの時代小説を残し、先年他界しました。読者の大部分はおそらく中高年であろうと思われます。特にサラリーマンにはよく読まれているのではないのでしょうか。藤沢文学の特徴の一つに風景描写のよさがあります。それは、まるで絵を見ているようです。

表題の「蝉しぐれ」は、東北地方にある海坂藩という架空の藩を舞台にした牧文四郎という下級藩士の少年時代から中年までの物語です。この小説は、中高年だけでなく若い読者にも受け入れられるのではないかと思ひ、紹介します。この小説は、時代小説といっても、しいて分類すると、いわば青春時代小説といったようなものです。文四郎は、罪人の子という逆境にあえぎながら、友情や初恋をはぐくむとともに、学問や剣の修行に励みます。これを現代に置き換えると、勉強や部活動に励む現在の高専生にも通じるものがあるのではないかと思ひました。

物語は、御前試合での勝利、初恋の人の窮地を救うなどのエピソードを挟みながら進行します。しかし、初恋の人「おふく」は、江戸屋敷に上り、殿のお手がついて、いわゆる側室となり、別れが待っていました。クライマックスは、20数年が経過し、郡奉行という役職に出世した文四郎と後家さんになった「おふくさま」が海沿いの宿で再会します。「文四郎さんの御子が私の御子で、私の御子が文四郎さんの御子であるような道はなかったのでしょうか。」というおふくさまのせりふには泣かされます。

近年、「男はつらいよ」シリーズで有名な山田洋次監督は、藤沢作品に惚れ込んだのか、隔年ごとに藤沢作品を映画化しています。最新作は、木村拓哉主演による「武士の一分」というものです。映画を見てから小説を読むもよし、小説を読んでから映画を見るもよし。一度も藤沢文学を読んでいない人は、この機会に藤沢文学に触れられることをお勧めします。そして、そのよさを味わって欲しいと思ひます。

若き数学者のアメリカ

藤原正彦 著 (新潮社)

学生課長 河野美奈



今年大流行した「国家の品格」の著者、藤原正彦氏は数学者である。20数年前、私が某大学の数学科事務室に勤務していた頃、「若き数学者のアメリカ」という本に出会った。数学者というタイトルに興味を持ったのと、パラパラめくった本の書きぶりがおもしろく、アメリカ留学時代の出来事を軽妙洒脱に表現された内容に惹かれて一気に読み上げ、「数学者の言葉では」、「心は孤独な数学者」等が続いて読んだ。大学の数学の先生といたら、堅物、変人等々あまり芳しくないイメージが先行するが、藤原先生のようにユーモアに溢れる人材も少なくない。実際私が出会った数学者達は、数学なのに数字が少ない論文とつきあうのに疲れたら、音楽を聴いたり、山登り、魚釣りなど幅広い趣味を持ち、上手に気分転換する術を身につけた魅力的な人物が多かった。

「若き数学者のアメリカ」を読んで、若手研究者の意気込み、アメリカの大学生の考え方や勉強への姿勢等を垣間見た気がした。この本をきっかけに身近にいた先生達の留学時代の話聞き、外国生活に憧れたことも懐かしい。藤原先生を直接知っているわけではないが、「国家の品格」を読んで、藤原先生が変わったとは思わなかった。むしろ若い頃的情熱そのままに日本の現状を憂う気持ちが溢れていることを感じた。「国家の品格」を読んだ方には、是非「若き数学者のアメリカ」等の若い頃の著作を読んで、著者の情熱や奥深さを知って欲しい。

余談として、藤原先生の父親が、気象学者で山岳小説の大家新田次郎氏であることはよく知られているが、戦後朝鮮からの引き上げの壮絶な体験を記された「流れる星は生きている」の著者、藤原ていさんが、藤原先生の母親であることはあまり知られていない。親子関係を知ったとき、ていさんの強靱な意志力がなければ、「若き数学者のアメリカ」は世に生まれず、作家の遺伝子の存在を強く感じた。

余談として、藤原先生の父親が、気象学者で山岳小説の大家新田次郎氏であることはよく知られているが、戦後朝鮮からの引き上げの壮絶な体験を記された「流れる星は生きている」の著者、藤原ていさんが、藤原先生の母親であることはあまり知られていない。親子関係を知ったとき、ていさんの強靱な意志力がなければ、「若き数学者のアメリカ」は世に生まれず、作家の遺伝子の存在を強く感じた。

大分県高等学校図書館研究大会の感想

制御情報工学科 3年 鈴木 克也

平成18年7月27～28日に開催された図書館研究大会に参加しました。他校の生徒と交流する機会が初めてだったという事、しかも見知らぬ人と寝食を共にするというのは全く初めての経験だったので、少し緊張しながら臨みました。

私が参加した読書会の課題図書は「オシムの言葉」でしたが、オシムについてや、その重みのある言葉の背景にあるものは何なのか、とりわけ強く印象に残っている言葉は何かといった点に関して、意義のあるディスカッションをする事ができたと思います。地区別交流会においても、充実したレクリエーションを楽しむことができました。また、大分高専の図書館について宣伝する良い機会ともなりました。二日目の館報作りの講義は、高専では学生による館報作りは行われていないので、殆ど関係ありませんでしたが、他校の図書委員たちが製作した館報は新鮮なもので、とても興味深い経験となりました。

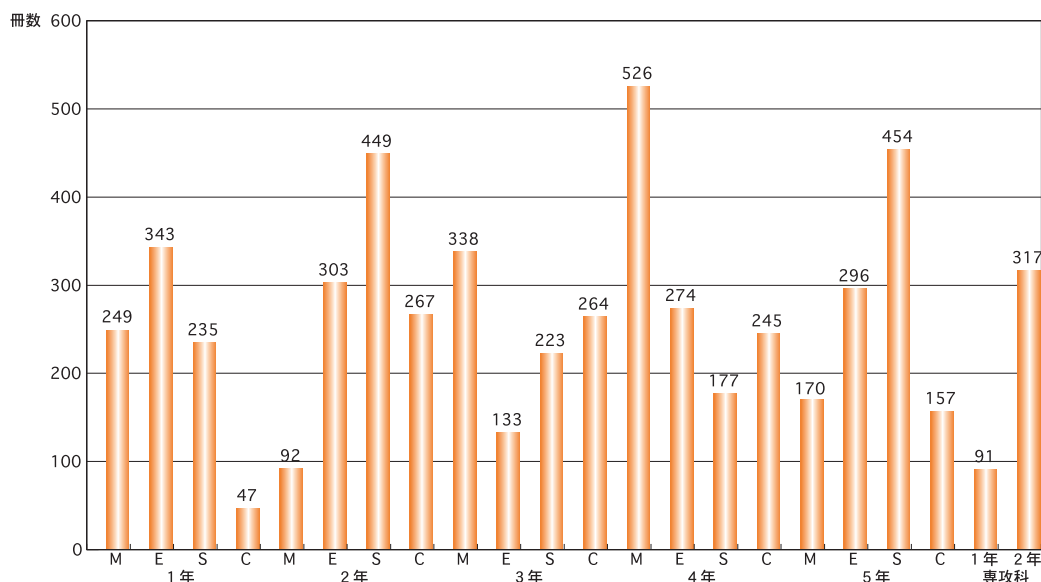
僅か二日間という短い研修ではありましたが、貴重な経験ができた大会となりました。

平成18年度(後期)学生図書委員名簿

学年	学科	機械工学科	電気電子工学科	制御情報工学科	都市システム工学科
1年		中山泰宏	鞭目伸章	阿部 功	竹中裕基
		鞭目広晃	森山和博	佐藤昌樹	首藤英利
2年		戸高 彰	橋本奈緒子	丸山志保	神志那優花
		清水遼太	石田大貴	川原隆典	平村 萌
3年		相沢昇太	工藤宏幸	田中雄大	末永竜也
		横田尚之	上野 涼	鈴木克也	仲元彰宏
4年		荻本垂哉	川野泰和	◎古賀淳也	中島博史
		毎熊宗幸	首藤高德	中里将樹	森 隼人
5年		村田政幸	★松下容子	◎重光 葵	徳丸和矢
		吉廣俊志	姫野孝文	阿部晃一	井上和昭

★委員長 ◎副委員長

平成18年度4月～9月 クラス別貸出統計



編 集 後 記

今回の図書館報では、前図書館長の梅津先生に大分高専の思い出を語っていただきました。高専創立10周年ごろに現在の図書館が整備されたこと、若かりし頃の梅津先生のご活躍、複数の先生方による技術論の授業など、大変面白く、興味をひかれる内容でした。また、このような高専の昔の話を、もっと多くの先生からお聞きしたいと思いました。私が大分高専に赴任してから今年で4年目、まだ5年の学生よりも大分高専のことを知りません。大分高専の歴史を知る機会を与えてくださった梅津先生、そして本図書館報に寄稿してくださった皆様に感謝いたします。

(図書館長補佐 軽部 周)